



大陸から来た陶磁器

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 大宰府出土の陶磁器

国際貿易港であった博多を近くに擁する大宰府は、古代から中世にかけて、大陸から多くの文物がもたらされました。

大宰府史跡、特に観世音寺の周辺地区の発掘調査を行うと、往々にして、白磁や青磁などの様々な貿易陶磁器の陶片が出土します。ここでは、観世音寺出土資料を中心に、大宰府出土の陶磁器について見ていくことにしましょう。

2 奈良時代

大宰府において初めて貿易陶磁器がみられるのは、奈良時代からです。この時代は遣唐使による交易が盛んに行われた時代で、遣唐使によってもたらされたと考えられています。中でも、唐三彩の三足炉は、黄色・緑色・褐色の三色の釉がかけられた美しいもので、九州では唯一、全国的に見ても数例しかなく、近年口縁部分が発見されたことから、国内出土事例としては、最も残りの良いものだと考えられます。この他、絞胎陶枕など、稀少な陶磁器が少なからず

見つかっています。これらの唐三彩は、中国・河南省で作られたと考えられます。

3 平安時代

9世紀に入ると、貿易陶磁の出土量は、飛躍的に増加します。特に、中国・春秋時代の越国の故地であることから名が付いた越州窯で焼かれた青磁（越州窯系青磁）が非常に多くもたらされ、その美しい緑色は、国内で緑釉陶器の製造を促すほど、当時の人々にとって魅力的であったに違いありません。北部九州では、全国の約半数以上の越州窯系青磁が出土しており、その卓越した状況をうかがい知ることが出来ます。

そして、中国・宋の時代になると、さらに多くの陶磁器がもたらされることとなります。11世紀後半頃になると、中国・江南地方で造られた白磁碗（口縁部が玉縁状になるのが特徴）や白磁四耳壺などが非常に多くもたらされますが、その後、12世紀に入ると、それらに加えて、中国・浙江省が産地である同安窯系青磁や、龍泉窯系青磁も多くもたらされるようになります。

これら11世紀後半以降の陶磁器は、大宰府のみならず、全国的に爆発的にもたらされていきます。観世音寺の発掘調査でも、一度の調査で数え切れないような量の白磁・青磁が出土することも稀ではありません。

また、この頃から、中国の陶磁器に加え、朝鮮半島の高麗で生産された青磁や無釉陶器などももたらされるようになり、さほど多くはありませんが、特に博多や観世音寺では他を圧倒する出土割合を占めています。

白磁や青磁以外では、やや柔らかい胎土を有する褐釉陶器や鉄絵が描かれた黄釉陶器の盤なども出土しており、特に褐釉の壺



8～9世紀頃の陶磁器

などは、^{きょうづつ}経塚の経筒として使用される事例も多く見られるようになり、陶磁器の種類も豊富になっていきます。



11～12世紀頃の陶磁器

4 鎌倉・室町時代

そして、鎌倉時代以降も龍泉窯系青磁をはじめとする多くの陶磁に加え、14世紀の前半頃にはベトナム陶器など、東南アジア産の陶器も見られるようになります。

この頃のベトナム陶器は、日本の出土事例は100点ほどしか知られていませんが、その内、観世音寺近辺で出土したものは、約30点ほどあり、その出土率の高さがうかがい知れます。中国の陶磁器には見られない、どこか素朴な雰囲気^{うきぼりもんよう}の鉄絵や浮彫文様が施されているのが特徴です。まさに大宰府が国際貿易都市博多を通じて、海外に広く開かれていたことを示すものと言えましょう。

また、15世紀以降には、中国・明で作られた^{そめつけ}染付や、朝鮮半島で作られた^{ぎつゆう}雑釉陶器や^{ぞうがんせいじ}象嵌青磁、^{ふんせいざき}粉青沙器などもたらされるようになります。

観世音寺出土の^{りちよう}李朝の陶器に「仁寿彦陽」と象嵌されたものがありますが、これは「仁寿府」という^{りし}李氏朝鮮の役所に納めるために、「彦陽」の地で焼かれたことを示しています。「彦陽」という地名は、現在では韓国・慶尚南道に「彦陽(オニャン)」という今ではプルコギで有名な都市がありますが、そこで焼かれたものかもしれません。本来、官製品として朝鮮の役所に納めるべきものがもたらされてしまう、大宰府という地は、それほど大陸に近かったという証とも言えるのではないのでしょうか。

(学芸調査室 岡寺 良)



中世の陶磁器



編集 発行:平成23年2月1日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>